

# 無縁・無援を越えて

いのちの現場から《9》

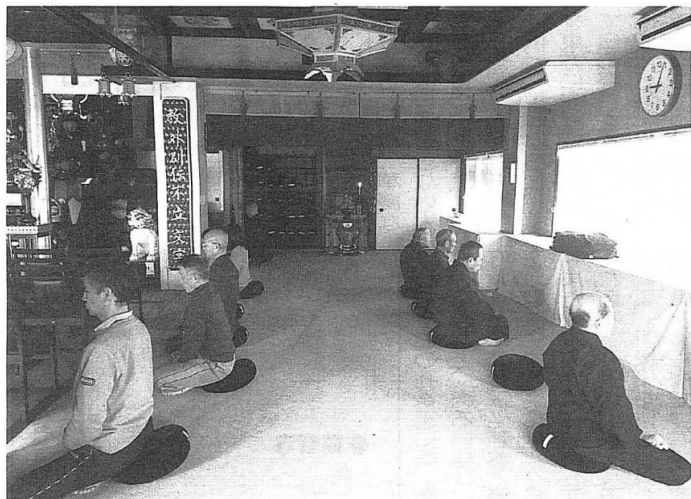
見性院の橋本英樹住職は「僧侶が天職。自分が人間として人の役に立つ、人を救えていることは何物にも代え難い価値です。でもそれはこれまで私自身が助けられてきたからで、していることは、いわば恩送り」と語る。「無縁社会」の現状を肯定した上で、その行いの具体的な形を「みんなの寺」について語る。檀家ではなく「自由になつた信徒、あるいは地域密着から誰でもが広くどこからでもいつでも集まり、つながる寺」として社会貢献したい」と強調する。

## 催し開き法話

寺で写経や落語会などいろいろな催しを開いている。毎週木・日曜の坐禅会では現役サラリーマンや高齢者から様々な人が毎回十数人参加する。本堂で40分間坐つ

# 誰もが集い、心と心をつなぐ

## 「みんなの寺」づくり



見性院の坐禅会にはいろいろな人たちが参加する

「みんなの寺」づくりは、見性院の坐禅会にはいろいろな人たちが参加する。本堂で40分間坐つて説法と読経があり、その後客殿に移ってお茶を飲みながら住職も交えて話をする。「親の介護が大変」「年を取ってのんびりできた」と世間話を中心だが、これが人気でリピーターも多い。代の男性は、仕事や子育てで忙しい人、会社で忙しかつた人、離婚した人、一人暮らしの人、高齢者、外国人など、様々な人が集まり、心と心をつなぐ。住職は「みんなの寺」づくりの目的は、心と心をつなぐことにある。心と心をつなぐことで、社会の絆が生まれ、人々の心は安らぎ、幸せになる。住職は「みんなの寺」づくりの目的は、心と心をつなぐことにある。心と心をつなぐことで、社会の絆が生まれ、人々の心は安らぎ、幸せになる。

(北村敏泰)

て説法と読経があり、その後客殿に移ってお茶を飲みながら住職も交えて話をする。「親の介護が大変」「年を取ってのんびりできた」と世間話を中心だが、これが人気でリピーターも多い。代の男性は、仕事や子育てで忙しい人、会社で忙しかつた人、離婚した人、一人暮らしの人、高齢者、外国人など、様々な人が集まり、心と心をつなぐ。住職は「みんなの寺」づくりの目的は、心と心をつなぐことにある。心と心をつなぐことで、社会の絆が生まれ、人々の心は安らぎ、幸せになる。

「ね」と住職は振り返る。住職は坐禅会など催しの際に必ず、社会の日々の出来事に絡めて法話をする。昔ながらの職人が、海外から安価な製品が入ってきて仕事を圧迫されても妥協せず「あくまで良い物を作りたい」と述べた。新聞などからそんなエピソードを挙げ、「利益を追うのではなく無心に生きる道」の意義を説く。車座になってじっと耳を傾ける参加者に住職は宗祖道元の言葉を引き、「見返りのない世界、それが無。修行そのものが悟りであり、修行したから悟って偉くなるのではなく、いつもはできなくても今この本堂では、心配せずして無になることを目指し、心は仏教の内実が染み込んだのか。今、目の前にある現実から出発することが大事だと住職は明言する。現前の世界こそが問である、という『正法眼蔵』に出ている「現成公案」の教えだ。だがその現前の無縁社会は、格差による貧困や孤立死など悲惨な現実の連続。それをどうするか。橋本住職は「上求菩提下化衆生」という言葉を出し、「聖と俗は対のもの。聖を貫いておれば必ず道が開ける」と答えた。「日々、発心。発心は百万回です」と言つその姿勢が「無縁」を超える力になるのかどうかは、これからの取り組みにかか

## 現実から出発

法話で「皆、孤独ですが励まし合って生きていきましよう」と訴え掛ける住職

は、「現実には様々な悩み苦しみを抱えている人々はつながりを求めている。その心と心とを結び、つなぐのが『みんなの寺』です」と狙いを語る。企業戦士だった男性が得度して弟子入りするなど、仏の道に入ってくる人もいるという。そのようなつながりがビジネス感覚の寺経営によって生まれたのであれば文化講座や自己開発セミナーとどう異なるのか。そうではなく社会で生きる人々の心に仏教の内実が染み込んだのか。